



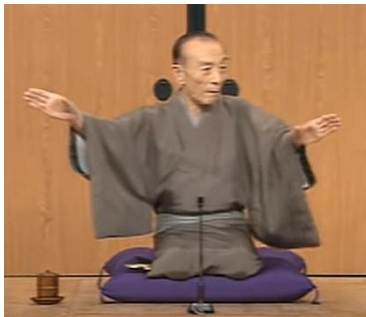
ちょっとそこまで ~お散歩日和 (植物編)~



# スイセン



- ①ラーメンの中で咲いてる花は…
- ②食べるとおいしい花は…
- ③ちょっと前に見た花は…
- ④花束にできない花は…
- ⑤とっても無口で静かな花は…
- ⑥いつも斜めに咲く花は…
- ⑦ふるさとに帰ると咲いてる花は…
- ⑧冷蔵庫に咲く花は…



さて、今回取り上げるのは「トイレに咲く花は…」です。団地内のあちこちで花を咲かせ始めています。そう、スイセンです。

今は亡き桂歌丸の十八番に「竹の水仙」があります。講談ネタの演目です。主人公は、日光東照宮の眠り猫で有名な、伝説の彫刻職人である左甚五郎。甚五郎が程ヶ谷宿で逗留した先の宿代として竹で作った水仙を巡っての人情噺です。さすが名人技と思わせる作品として、水仙の蕾に水をやると、明け方に朝日を受けて可憐な花が開くという設定にしています。最終的に肥後熊本の本細川越中守が300両で買い求めます。それを受けて、宿の亭主が神奈川中の竹を買い占めるのもっと膨らんで欲しいと願うのですが、甚五郎曰く「二度と彫らない。竹に花を咲かせれば寿命が縮む。」というサゲ（オチ）で終わります。

話はこれで終わりません。数年前でした。この、水をやると水仙の花が咲くという作品を、実際に、樞（カヤ）と鹿の角で作ってしまった人が現れたのです。木彫刻家の大竹亮峯（りょうほう）さんです。YouTubeを見ますと、確かに、水を注ぐとゆっくりと本当に花が開くという、目を疑うような技巧シーンが見られます。とにかく衝撃的な映像です。この機会に一度ご覧になってみてください。



<https://www.youtube.com/watch?v=YSxvA6p0TGU>

前置きが長くなってしまいました。本題のスイセンについて触れたいと思います。団地内のあちこちでその姿を見ることができます。育てやすく、放っておいてもどんどん増えていきますし、ちょうど花の少ない時期に彩りと潤いを添えてくれるので貴重な存在でもあります。



スイセンという和名は、漢名の「水仙」を音読みしたものです。これは、「仙人は、天にあるを天仙、地にあるを地仙、水にあるを水仙」という中国の古典によるものです。水辺を好んで繁茂する清らかな花の姿と、豊かな芳香を「仙人」に譬えたということになります。

しかし、この花の原産地は地球海沿岸であることを考えてみると、この縁起はあまりにも似ていることが多いので、多分にナルキッソスの神話の影響を受け、スイセンが伝来した当時の中国で創作が加えられたものではないかと考えます。

なお、余談ですが、練馬区の移動教室先の1つに「ベルゲ下田」があります。その宿舎の1kmほど先に、水仙の群生地として有名な爪木崎があります。写真右奥に小さく見えるのが爪木崎灯台です。多くの学校では、左奥に見える小島周辺で磯遊びに興じることが多いようです。ウミウシが多く、時にはタコもいて、子供たちは時間を忘れて過ごす場所です。手前の広場はいつもテングサの干場になっています。



最後に、ワーズワースの「I Wandered Lonely as a Cloud」、別名「The Daffodils」の詩を紹介します。ラップズイセンなので少し趣きが異なりますが、やはり水仙の群生する景色だったはずです。「Daffodil」とは、アングロサクソンの古語で「早く来るもの」の意だそうです。

谷間をただよう雲のように  
一人さまよい歩いていると  
思いもかけずひと群れの  
黄金に輝く水仙に出会った  
湖のかたわら 木々の根元に  
風に揺られて踊る花々

I wandered lonely as a cloud  
That floats on high o'er vales and hills,  
When all at once I saw a crowd,  
A host, of golden daffodils;  
Beside the lake, beneath the trees,  
Fluttering and dancing in the breeze.

銀河に輝く星々のように  
びっしりと並び咲いた花々は  
入り江の淵に沿って咲き広がり  
果てしもなく連なっていた  
一万もの花々が いっせいに首をもたげ  
陽気に踊り騒いでいた

Continuous as the stars that shine  
And twinkle on the milky way,  
They stretched in never-ending line  
Along the margin of a bay:  
Ten thousand saw I at a glance,  
Tossing their heads in sprightly dance.

湖の波も劣らじと踊るが  
花々はいっそう喜びに満ちている  
こんな楽しい光景をみたら  
誰でもうれしくならずにいられない  
この飽きることのない眺めは  
どんな富にもかえがたく映る

The waves beside them danced; but they  
Out-did the sparkling waves in glee:  
A poet could not but be gay,  
In such a jocund company:  
I gazed - and gazed - but little thought  
What wealth the show to me had brought:

時折安楽椅子に腰を下ろし  
物思いに耽っていると  
脳裏にあのときの光景がよみがえる  
孤独の中の至福の眺め  
すると私の心は喜びに包まれ  
花々とともに踊り出すのだ

For oft, when on my couch I lie  
In vacant or in pensive mood,  
They flash upon that inward eye  
Which is the bliss of solitude;  
And then my heart with pleasure fills,  
And dances with the daffodils.

この詩を読んでいますと、幸せは今、この瞬間にも自分の周囲にあるのであって、明日を待つ必要はないと語りかけているように感じます。幸せは探すものではなく、気付くものなのだからと。

スイセンについては、当団地ホームページの「花便り」でも触れていますので、できれば、そちらも併せてお読みいただければと思います。